

2016年度 北海道大学 前期 国語

一 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	40分	平田オリザ『わかりあえないことからーコミュニケーション能力とは何か』からの出題である。平田オリザは日本の劇作家、演出家で、代表作に『東京ノート』『ソウル市民』三部作などがある。 現代口語演劇理論の提唱者であり、1980年代に小劇場を席卷した絶叫型の演劇スタイルに対抗して、1990年代以降、日本人らしい自然な会話とやりとりで進行していく「静かな演劇」の作劇術を定着させた。	問二〜四は設問の要求が単純で解答しやすい問題であるのに対し、問五は抽象的で「文章全体の趣旨を踏まえて」という要求もあり、与えられている字数も多い。北海道大学の現代文は、近年このような問題構成をとる傾向が強い。また、問二〜四が比較的やさしい設問であるためここでは点差はあまりつかず、問五で大きく点差がつくことが想定される。したがって、受験生が採るべき手段は、まず問二〜四のような基礎的な問題で限りなく失点をしないように訓練

傾向と対策
をし、それから問五のような問題で得点を最大化できるようにしていくことである。

解答

問一 1 曖昧 2 愚直 3 措置 4 籠城 5 培 6 拍車
7 成就

問二 登場人物の設定などの観客に有効な情報を無理なく伝達するため。(30字)

問三 成員個々人で異なる価値観が表出・衝突する中で、集団内で対話が起ころということ。(39字)

問四 ほぼ等質な価値観・生活習慣を共有する社会の中で成立した、説明を重視せず、推察しあう日本文化と、宗教・価値観の非共有を前提として、互いに説明を施しあう欧州の文化。(80字)

問五 国際社会を生きる日本の若者は、文化的に少数派たる、言語化せずに察しあう会話的な自国のコミュニケーションに誇りをもちつつも、無粋に思われることでも言葉で他者に説明する能力を身につけるべきだと考えている。(100字)

本文解説

段落解説

I 「会話」と「対話」(第1〜第11段落)

日本語では区別が極めて曖昧な概念である、「対話」と「会話」だが、英語では異なる概念である。『ケンブリッジ英英辞典』の記述を踏まえて、筆

者は「会話」を「価値観や生活習慣なども近い親しい者同士のおしゃべり」として、「対話」を「あまり親しくない人同士の価値観や情報の交換。あるいは親しい人同士でも、価値観が異なるときに起こるその摺り合わせなど」として定義している。

そして、演劇、とりわけ近代演劇においては「対話」の言葉が重要視されることが述べられる。家族などの親しい者同士の「会話」がいくら続いても観客に有効な情報は出てこないため、他者を登場させ、「対話」の構造をつくることで、登場人物の職業などの観客に有効な情報を無理なく伝達させるのだ。また、親しい人同士でも価値観が異なれば「対話」が起こる。この典型例として『忠臣蔵』が取り上げられる。『忠臣蔵』は近代演劇ではないが、数ある歌舞伎作品の中でこの作品がこれほど繰り返し上演され、映画やドラマになっているのは、近代的な要素が多く含まれているためである。戦闘から離れ、平和に一日中「会話」を続けていた藩士たちが、藩取りつぶしに直面し、個々の価値観を表出・衝突させることでドラマが展開していく。ここに、近代劇を支える「対話」の原理があるのだ。

II 日本とヨーロッパのコミュニケーション文化（第12～第17段落）

日本社会には、「対話」という概念が希薄である。日本社会は、ほぼ等質の価値観や生活習慣を共有した者同士の集合体Ⅱムラ社会を基本として構成されたために、独特な「わかりあう文化」「察しあう文化」が培われた。一方、ヨーロッパは、異なる宗教や価値観が陸続きに隣り合っているために、自分を他者に言葉できちんと説明できなければ無能だと判断される社会を形成してきた。これを筆者は「説明しあう文化」と呼んでいる。

III 文化的少数派として国際社会を生きる（第18～第24段落）

これらの日本とヨーロッパの文化体系はどちらが正しい・優れているというものではない。俳句など様々な素晴らしい芸術文化は日本の「わかりあう文化」「察しあう文化」から生み出されてきた。世界における少数派としての利点もある。だが、やはり文化的に少数派であるという認識は必要であり、それをもっていなければ日本人はいつまでも世界において理解不能な変わり者扱いされることになる。否が応でも国際社会を生きていかなければならない日本の若い世代には、自国の文化に対する誇りを失わせないままで、少しずつでも他者に言葉で説明する能力を身につけてあげたいと筆者は考えている。

しかし、日本人にとって「説明する」とは虚しいことなのである。日本人同士で通常は「察しあう」のが当然である、あるいは説明するのは無粋であるようなことに対する、身も蓋もない説明を、他者に向かって繰り返しているかなければならない。本当に私たちが行っていかなければならない精神的な観点における「開国」とは、こうした説明を繰り返していくという空虚に耐えるということなのである。

百字要言

日本の若者は、ほぼ等質な価値観を共有する日本社会の中で成立した、言語化せずに察しあう特有の文化に誇りを持ちつつ、国際社会を生きる以上、価値観を共有しない他者に言葉で説明する能力を身につけるべきである。

（100字）

用語解説

流動性 物体や観念が、液体や気体などのように、固定せず流れ動く性質、

変化する性質のこと。

斑鳩 法隆寺のある奈良県の斑鳩町を中心とした地域のこと。

設問解説

問一

解答 1 曖昧 2 愚直 3 措置 4 籠城 5 培 6 拍車

7 成就

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養型

解説

1、2、3、5、6、7はいずれも入試で非常によく問われる漢字であり、全問正解を目指したい。4は「籠城」という誤答が散見されるが、正解はウ冠ではなく、竹冠である。ちなみに「寵」は特別に可愛がる、非常に気に入られるといった意味で、寵愛、天寵などと用いられる。

問二

解答 登場人物の設定などの観客に有効な情報を無理なく伝達するため。

(30字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 一般化型

解答範囲 I (第1～11段落)

解説

まず、傍線部中の指示語の指示内容をおさえる。「こういった場面」とは、前段落をみれば、家族が「会話」をしている場面のことだとわかり、そうした場面では、今さら子どもが父親に父親の職業などを聞くのは非常に不自然

で聞くわけにはいかないため、観客に有効な情報がなかなか出てこないと述べられている。では、そのような場面に「他者を登場させる」とどのような利点があるのだろうか。傍線部直後の具体例を読み進めると、娘の恋人が初めて家を訪れた際に、娘の恋人に対する母親の応対・世間話を通じて父親の職業がわかる。すなわち、他者たる娘の恋人が登場することで、観客に有効な情報が出てきたのである。一般に、**手段→目的の論理関係は、原因→結果の論理関係と非常に相似性が高い**。他者の登場が原因となって、観客に有効な情報が伝わるという結果を生み出す、という論理関係は、他者の登場を手段として、それによって観客に有効な情報を伝達するという目的を達成する、という論理関係とすり替えが利くのである。(ここで、二つの論理関係が同値ではなく相似性が高いと譲歩した理由は、手段→目的関係には、目的を達成しようとする意図と、まず目的が先に設定されているという時系列の要件があるニュアンスが強いのに対し、原因→結果関係にはそのようなニュアンスはなく、基本的に因果関係を主張するだけだからである。)この相似関係は本問のような「なぜか」を問う問題や因果関係の読解において非常に役に立つ定理なので、頭に入れておくことを勧める。さて、この相似関係を用いれば、他者を登場させたのは、観客に有効な情報を伝達するためである、といえる。したがって、本問の解答は「観客に有効な情報を伝達するため」ということを中心にまとめればよい。ただ、これではまだ15字であり、不十分である。そこで、もう少し内容を充実させる。「観客に有効な情報」とだけ書かれてもその内容がよくわからないので、もう少し補充したい。ただ、「お父さんは銀行員である」などと書くのは具体的すぎるので、ある程度一般化・抽象化して、「登場人物の設定など」とする。また、子どもが父親に「お父さん、仕事なに？」と聞くわけにはいかないと述べられているのは不自然だからであり、逆にいえば、不自然でも良ければ子どもに今さら「お父

さん、仕事なに？」という台詞を言わせてもいいのだ。そこで第5段落第3文も踏まえて、観客に有効な情報を「無理なく」伝達させるため、と記述し、厳密性を高めるとよい。

最終的な解答は、「登場人物の設定などの観客に有効な情報を無理なく伝達するため。」というようになる。

《解答要素》

- ① 「登場人物の設定など」
- ② 「観客に有効な情報」(①への評価として)
- ③ 「無理なく伝達するため」

※ 解答は「〜ため。」(あるいは「〜から。〜)と締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第4段落5文目
- ② 第4段落4文目
- ③ 第5段落4文目

問三

解答 成員個々人で異なる価値観が表出・衝突する中で、集団内で対話が起ころうということ。(39字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 I (第1〜11段落)

解説

「近代的な要素」とはどういうことを説明する問題である。まず、傍線部を含む第6段落の内容を確認すると、近代演劇でないにもかかわらず近代

的な要素を多く含む『忠臣蔵』は、「親しい人同士でも、価値観が異なる」と『対話』が起ころうことの典型的な例として持ち出されていることがわかる。同段落第2文と第3文は、間に接続詞がなく羅列されているだけなので、断言することはできないし、断言すればそれは早計ともいえるのだが、どうも「近代的な要素」と「価値観が異なる」と『対話』が起ころうことには何か関係がありそうである。ある程度の推測をもって読み進めていく。

続く第7〜第9段落では、『忠臣蔵』のあらすじが記されている。前段落で述べられたように『忠臣蔵』は具体例であり、その具体例についての記述を丁寧に読んで自分で抽象化して解答を書いてもいいのだが、**一般に、具体例のあとには筆者自身がその具体例を抽象的にまとめ、そこで筆者が具体例を挿入した意図、すなわちそこで筆者が何を言おうとしたかが明らかにされることが多い。**そこで、第7〜第9段落は軽く読み流して、第10段落をみると、「ある集団が、個々人ではどうしようもできない大きな運命に晒されたときに、その成員一人ひとりに、それまで自身も自覚していなかったような価値観、世界観が表出し、それがぶつかりあうことによってドラマは展開していく」ことこそが近代劇を支える「対話」の原理である、と述べられている。「近代劇を支えるもの」は「近代的な要素」でありうる。また、第7〜第9段落で述べられた『忠臣蔵』のあらすじを読めば、この「対話」の原理は『忠臣蔵』の中にみられることがわかる。つまり、『忠臣蔵』の中で典型的にみられる「近代的な要素」とは「対話」の原理だったのである。やはり、先ほどの推測は正しく、「近代的な要素」と「価値観が異なる」と『対話』が起ころうこととは等置されるべき関係だったのである。また、今回もやはり第7〜第9段落で具体的に述べられたことが、第10段落で抽象的にまとめられるという流れであった。

さて、ここまででおおよその解答の方向性は定まった。本問は「近代的な

要素」とはどのようなことかという問題であるから、「価値観が異なると『対話』が起る」ということを中心に解答をまとめればよいのだ。しかし、これだけでは字数不足は当然のこと、内容も十分ではないと想定されるので、「価値観が異なると『対話』が起る」ということをもう少しわかりやすく補足しながら解答として体裁を整えることにしよう。まず、「価値観が異なると」という内容を第10段落の「価値観が表出し、それがぶつかりあう」という箇所を用いて丁寧に言い換えてみると、「異なる価値観が表出・衝突する」というように表現でき、こうなるとこの「価値観」の所有者が気になるのでそこも補充してみる。この「価値観」は、いうまでもなく個々人の価値観であるのだが、第10段落を参照すれば、ここでの個人はある集団の成員であることがわかる。『忠臣蔵』でいえば、当然赤穂藩という集団の成員ということになる。そして、ある集団の成員同士で異なる価値観が表出するからこそ、衝突が発生するのだ。いかなる同一集団内にもいない、つまりその二者がいかなる集団をも形成しない、まったく無関係な者同士が異なる価値観を持ったところで衝突しないだろうし、対話も起こらないと考えられるからである。よって、**価値観の所有者たる個人はある集団の成員であるという限定は必要である。**

その他に、第6段落第1文の「親しい人同士でも」という箇所や第10段落の「ある集団が、個々人ではどうしようもできない大きな運命に晒されたときに」や「それまで自身も自覚していなかったような価値観、世界観が表出し」という箇所にかかわって、新たな条件を加える必要はないかと思っただ人もいるかもしれない。「近代的な要素」の説明として「親しい人同士でも」や「個々人ではどうしようもできない大きな運命に晒されたときに」や「それまで自身も自覚していなかったような」といったこれらの限定を掛けることはそれぞれ整合するのか、そして必須なのかということを考え

てみる。ここで、『対話』の筆者による定義を確認してみると、第2段落から「対話」とは、「あまり親しくない人同士の価値観や情報の交換。あるいは親しい人同士でも、価値観が異なるときに起るその摺り合わせなど」である。いま話題となっているのは、異なる価値観が表出してきてそれらが衝突したときであり、先ほどの定義から、「あまり親しくない人同士」については、異なる価値観を持っていないようが持っていないが、「対話」が発生するから、価値観の相違に触れておけば、特に「親しい人同士でも」という限定は（もちろん整合するが）特に必要はないと思われる。また、「個々人ではどうしようもできない大きな運命に晒されたときに」というのは、個々人の努力で価値観の相違が表出・衝突せずにすむようなレベルではないという、相異なる価値観が表出しやすい補足条件に過ぎないと考えられるため、なら条件として矛盾はないが、必要ではなく優先度は低い。「自身も自覚していなかったような」という限定については、それぞれが自身の価値観を自覚していようといまいと、相異なる価値観が表出してしまえば衝突すると思われることから、これは一種の強調表現であり、整合するが必要ではないと思われる。したがって、これらの条件は、もし字数的に大幅な余裕がある場合は加えてもいいが、加える必要は特にない。

また、「異なる価値観が表出・衝突」と「対話が起る」をいかにつなげるべきか迷った人もいるだろう（逆にいえば、こうした**要素間の接続の仕方を誤ると本文の論理関係を大きく逸脱し、要素は入っているのにまったく評価されない解答になってしまふことがあるので、今回、要素間の接続に一切注意を払わなかった人は気をつけるべきである**）。本文を参照すると、「価値観、世界観が表出し、それがぶつかりあうこと」によってドラマは展開している。これが、近代劇を支える『対話』の原理である。（第10段落）と書かれている。少し抽象的な書かれ方をしており、「価値観、世界観が表出し、そ

れがぶつかりあうことによってドラマは展開していく」ことが『対話』の原理」とイコールになっていることはわかるが、何が「対話」に対応しているのかがわかりにくい。この問題において散見される解答として「異なる価値観が表出・衝突することによって対話が起こる」というような接続の仕方をしていくものがあり、無難にみえるが、これだと、「対話」を「ドラマが展開していくこと」と等置しているようにみえてしまう。「対話」に「ドラマが展開していく」という意味は辞書的にもないし、本文でもこれまでそのような読める箇所は一切なく、これらは等置されない。では、「異なる価値観が表出・衝突する」と「対話」はどう接続させるべきなのか。ここで、「対話」の定義をもう一度よく考えてみる。筆者は、対話は価値観の交換や

果でなく、以上のようなプロセスを経て」によって」を採用したのであれば問題はない。

折り合わせだと述べている。これを踏まえると、まず個人間で異なる価値観が存在しており、それらが表出し衝突するときに交換・折り合わせⅡ対話は発生しているといえるかもしれない。異なる価値観をもつ人々が相対し、各々の価値観を表出・衝突させたその瞬間に対話はスタートしているとも考えられるのだ。その一方で、表出・衝突しても、人によってはしばらくお互いにらみ合って相手の価値観を受け入れず、交換や折り合わせを行わない可能性もあるかもしれない。ここまでみると、異なる価値観の表出・衝突は対話の原因(発生の順序に時間的ギャップが限りなく0に近くてもそこに因果関係があることを否定できない)であるといっても差し支えないため、「異なる価値観の表出・衝突によって対話が起こる」という接続の仕方もある結果的には正しいといえる。本解答では、「によって」でつなげることにし、先の懸念を抱き、表出・衝突と対話の時間的ギャップにある程度幅を持たせた、「異なる価値観が表出・衝突する中で、対話が起こる」という接続の仕方を採用した。「中で」という接続の方がベターだとは思いますが、「によって」でも誤りではなく、「対話」と「ドラマが展開していくこと」を短絡した結

傍線部の「近代的な要素」や第3段落の「演劇、とりわけ近代演劇」、第10段落の「これが、近代劇を支える『対話』の原理である」などと、本文であえて「近代」的と言及・強調されているのは、いわゆる近代個人主義という考えが根底にあるからだと考えられる。個人という概念の起源は古代ギリシアまでさかのぼることができるといわれているが、ここでいう**近代個人主義は、個人が身分階級や社団などの集団から十分に解放されていなかった、いわゆるアンシャン・レジームの時代との対比で、平等かつ独立した固有の個人によって国家・社会は構成されるべきであるというのが根本の考えである。**

(そこから発展して個人の自由や権利の確立を主張するに至り、さらに現在までさまざまな解釈がなされ、言葉の意味が拡張している。)つまり、近代になって、人々はその所属する集団でひとくりにされるのではなく、まず、各個人の違いを認め、個人が主体的・能動的に活動することが良しとされ、そうして多様な各個人はそれぞれのもつ、異なる価値観・考えゆえに衝突することになるのだ。以上のことから、ここまで述べた解答要素で「近代的な要素」の換言として必要十分であることが確認できたと思う。この近代個人主義は、直接的に問われることは少ないかもしれないが、今回のように、本文を読解し、自分の解答が的確かを確認するにしばしば役に立つ重要な概念なのでこの機会に頭に入れておくとうまいだろう。

以上から、最終的な解答は、「成員個々人で異なる価値観が表出・衝突する中で、集団内で対話が起こるということ。」というようになる。

《解答要素》

- ① 「成員個々人で異なる価値観」

② 「①が」表出・衝突する」

③ 「集団内で対話が起こる」

④ 「①が②なかで③」という構成になっていること。

※ 解答は「〜ということ。」「あるいは「〜こと。」「で締めくくること。

《参照箇所》

① 第6段落第1文、第10段落第1文

② 第10段落第1文

③ 第6段落第1文、第10段落第2文

問四

解答 ほぼ等質な価値観・生活習慣を共有する社会の中で成立した、説明を

重視せず、推察しあう日本文化と、宗教・価値観の非共有を前提として、互いに説明を施しあう欧州の文化。(80字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 II (第12～17段落)

解説

「両者」の特徴をそれぞれ書く問題である。まず、ここでの「両者」が何にあたるかを確認する。直前の第14～17段落を見ると、第16段落までは日本のコミュニケーション文化について述べられ、第17段落は「一方、ヨーロッパ」で始まっており、「両者」が日本のコミュニケーション文化とヨーロッパのコミュニケーション文化であることがわかり、またこれらは対比的に述べられている。したがって、日本とヨーロッパのコミュニケーション文化の特徴をそれぞれ書くことになる。

第13段落までは、「対話」に支えられている演劇などの話題を交えながら、

日本社会には「対話」という概念が希薄だということが述べられていた。これを踏まえて、第14～第16段落では日本のコミュニケーション文化の特徴が述べられている。第14段落では日本のコミュニケーション文化は、ほぼ等質の価値観や生活習慣をもった者同士の集合体として構成された社会の中で培われたものであると述べられ、第15段落では、稲作の例やこうした傾向に拍車をかけた徳川幕府などの具体的な情報を加え、第16段落で、筆者は日本のコミュニケーション文化を「わかりあう文化」「察しあう文化」と表現している。(ここで冒頭の第2段落で掲げられた「会話」と「対話」の定義を確認すると、第14～16段落では、日本社会は「会話」的であり、「対話」という概念が希薄であることについてその背景も含めて詳しく述べられていたということがわかる。)以上をまとめると、日本のコミュニケーション文化の特徴は、「ほぼ等質な価値観・生活習慣を共有する社会の中で成立した、「察しあう文化」であるといえる。

次に、それと対をなすヨーロッパの方を考える。続く第17段落を要約すると、ヨーロッパのコミュニケーション文化は、異なる宗教や価値観が陸續きに隣りあわせているために、きちんと他者に言葉で説明することを重視する、「説明しあう文化」だということになる。よって、基本的にはこれらをつなげて80字にすればよいのだが、日本の方は「察しあう文化」という説明では曖昧でわかりにくく、**本文で「(かきかっこ)がつけられた用語は筆者独自の定義づけがされていることが多いため、そのまま解答に残すのはできるだけ避けるべきである。**そこで、ヨーロッパとの対比を明確にすることで**内容を補充すればよい。**

最終的な解答は、「ほぼ等質な価値観・生活習慣を共有する社会の中で成立した、説明を重視せず、推察しあう日本文化と、宗教・価値観の非共有を前提として、互いに説明を施しあう欧州の文化。」というようなものになる。

《解答要素》

- ① 「ほぼ等質な価値観・生活習慣を共有する社会の中で成立した」(②を修飾するかたちで)
- ② 「説明を重視せず、推察しあう日本特有の文化」
- ③ 「宗教・価値観の非共有を前提として」(④を修飾するかたちで)
- ④ 「互いに説明を施しあう欧州の文化」
- ⑤ 「日本文化と欧州(ヨーロッパ)の文化」という方向性の解答になってくること。

※ 解答は「〜のこと。」で、あるいは体言止めで締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第14段落1文目
- ② 第16段落1文目
- ③ 第17段落1文目
- ④ 第17段落2文目

問五

解答

国際社会を生きる日本の若者は、文化的に少数派たる、言語化せずに察しあう会話的な自国のコミュニケーションに誇りを持ちつつも、無料に思われることでも言葉で他者に説明する能力を身につけるべきだと考えている。(100字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 理由補填型+要旨把握型

解答範囲 本文全体

解説

「この空虚に耐える」こととの背景にあるコミュニケーションの問題を著者

はどう考えているかという、要求が少しわかりにくい問題である。この設問文の意味するところを明らかにするところから始める。

そこで、まず基本的な動作として「この空虚」の指示内容を把握する。これは直前の第23段落を参照すれば、言葉にしては身も蓋もない説明を他者に向かっていることであり、「この空虚に耐える」とは、そのような虚しい説明を他者に向かつて繰り返すということであることがわかる。次に、「この空虚に耐える」こととの背景にあるコミュニケーションの問題という部分を読みほいでいく。背景とは因果関係を表すワードであり、原因や理由といった言葉との親和性が高く、因果関係において、「Aの背景にBがある」ということは、「Bが原因となってAが発生する」ということとイコールである。すなわち、この設問文は、あるコミュニケーションの問題が原因となつて「この空虚に耐える」という状況が発生している、ということを示唆しているのである。では、「この空虚に耐える」という状況を惹起するようなコミュニケーションの問題とは何なのか。前問では、日本とヨーロッパにおけるコミュニケーションのあり方の相異を整理した。「この空虚」、すなわち虚しい説明の具体例が「柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺」という俳句に対するものであり、ここではヨーロッパではなく、日本のコミュニケーションについての話をしているのは明白である。「この空虚に耐える」のが日本人である以上、その背景にあるコミュニケーションの問題も日本のコミュニケーションのものであると考えるのが妥当である。ここで、設問にある「コミュニケーションの問題」は、ヨーロッパ側が日本のコミュニケーションに合わせればよい、ヨーロッパ側のコミュニケーションのあり方が問題なのではないか、とも考えられるかもしれない。しかし、第20〜22段落をみてみると、察しあう・わかりあうという日本のコミュニケーションは世界的には少数派であり、少数派としての利点はあるものの、少数派としての自覚は必

要であり、その自覚を欠いたままでは国際社会を生きていくうえで、日本人はいつまでも理解不可能な変わり者扱いをされると述べられており、筆者はあくまでこれは日本側がヨーロッパ側に対応していくべき問題だという立場なのである。そして、これこそがまさにここで言及されているコミュニケーションの問題である。端的にいえば、世界的には少数派である日本のコミュニケーションのあり方をそのまま貫徹してしまうとヨーロッパをはじめとする世界から理解不能な変わり者扱いをされてしまうということである。また、そのままだと変わり者扱いされてしまうがために、日本人からすると身も蓋もない、虚しい感じがすることでも説明を繰り返す、という因果関係も成立する。

ここで注意したいのは、この問題は「この空虚に耐える」とはどういうことか、でもなければ、「この空虚に耐える」ことの背景にあるコミュニケーションの問題はどのようなものか、でもない。背景にあるコミュニケーションの問題は筆者はどう考えているか、という筆者の評価が問われているのである。本文で筆者の評価が述べられている箇所を探すと、第22・第23段落のそれぞれ末の「他者に対して言葉で説明する能力を身につけてあげたいと思う」、「身も蓋もない説明を、しかし私たちは、他者に向かって繰り返していかねばならないのだ」が該当する。これらを踏まえて、「この空虚に耐える」能力を身につけるべき、「この空虚に耐え」なければならぬ、といった方向性で解答に反映させることでこの要求に応える。

最後に、「文章全体の趣旨を踏まえて」という条件を満たしているかを認める。**文章全体の趣旨・論旨を踏まえて、といった付帯条件は、設問のメインの解答要素をある程度構想したあとに、満たしているかを確認するのが望ましい。**最初からこの付帯条件を意識しすぎると、それに引っ張られてメインの要求を忘れてなんとなく本文全体を要約したような解答になってしまう

まう可能性があるからだ。最後に確認して、自分の解答が文章全体の趣旨・論旨を踏まえてあれば、この付帯条件は解答プロセスの中で自動的に満たされていたわけで、別段何も書き加える必要もない。今回の問題に関していえば、「この空虚に耐える」の指示内容や筆者の評価は第21～23段落周辺で完結するが、「この空虚に耐える」ことの背景にあるコミュニケーションの問題の本質たる日本のコミュニケーションのあり方についての記述は、実は冒頭第1段落から続いており、本問に対する解答は「文章全体の趣旨を踏まえ」たものになっている。したがって、ここまでの解説で構想した解答はすでにこの付帯条件を満たしており、基本的に書き加えるべき要素はないことがわかる。なお、一つのテクニクとして、**近辺で見つけた解答要素について、本文全体でより一般的な表現がある場合はそれで換言すると「本文全体の趣旨を踏まえて」という気分を出すことができることを付言しておく。**

以上より、最終的な解答は「国際社会を生きる日本の若者は、文化的に少数派たる、言語化せずに察しあう会話的な自国のコミュニケーションに誇りをもちつつも、無粋に思われることでも言葉で他者に説明する能力を身につけるべきだと考えている。」というようなものになる。

《解答要素》

- ① 「国際社会を生きる日本の若者は」
- ② 「(③)に対する修飾語として」文化的に少数派()であることを認識しながら()なども可()」
- ③ 「言語化せずに察しあう会話的な自国のコミュニケーション」
- ④ 「(③)に対して」誇りを保持する」
- ⑤ 「無粋に思われることでも言葉で他者に説明する能力を身につけるべきだと考えている」

※ 解答は「〜と考えている。」と締めくくること。

《参照箇所》

- ① 第22段落1文目
- ② 第20段落1文目
- ③ 第12段落1・2文目、第16段落1文目
- ④ 第22段落1文目
- ⑤ 第22段落1文目

(昆野祐己、森慎太郎、丸岡賢人)

2016年度 北海道大学 前期 国語

二 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	40分	小林道憲『芸術学事始め』からの出題。小林道憲は日本の哲学者で、文明論も専攻しており、現代の批判的考察から生命論的世界観を構築することが特徴である。	問一～問三はやさしい問題が設置されており、問四は比較的難易度が高く、字数指定も長めとなっている。近年、北海道大学の大問二ではこのような形式がとられることが多い。まず何よりも優先すべきことは、問一～問三（この年ならとりわけ問三）で失点を防ぐことである。これらの基礎的な問題で確実に得点を重ねられるようになることが前提となつて、問四のような難しい問題への対応力もつくようになる。

解答

問一 作品は人間の構想力と力量だけでは作られず、粘土の素材、温度や湿度の条件など自然・偶然に随順しながら創造されるという特徴。

(60字)

問二 自己完結している素材の個性によって芸術家が受動的に創作を制限され、また芸術家が素材に精通して能動的に働きかける中で新しい形は生まれてくるということ。(74字)

問三 伊豆に至るまでの不安・動揺・無力感、そういう孤独を歌に託すしかなかった実朝の心情すべてが含まれていると理解すべきである。(60字)

問四 芸術作品の創作は、素材や芸術家の来歴に加えて創作過程での出来事一瞬一瞬から創発され、その過程で当初の想定から変わったたり、新たな着想が生まれ、また芸術家自身が成長していくものだから。(90字)

本文解説

段落解説

I 能動と受動の相互作用としての芸術(第1～第6段落)

芸術家は、対象をよく見て自分の感性でそれを構成し、作品を作っていくが、必ずしも自分の構想通りに作品を作り上げられるわけではない。陶芸は、その最も適切な例であり、人間の構想力と力量だけでは作品は作られず、粘土の素材、温度や湿度の条件など自然・偶然に随順しながら創造されるという特徴を持つ。制作の現場は、素材との対話であり、芸術家が素材の個性に精通し、素材へ働きかけ、その一方で素材が芸術家に制限をかけ、抵抗をしつつも形成を手助けしてくれるという、能動と受動の相互作用から創造的な形は生まれてくるのだ。

また、素晴らしい芸術作品は素材と形とが見事に一つになっており、芸術作品は「形成された素材」なのである。芸術家が素材の性質を熟知する必要があるのはそれゆえである。

II 創造過程に注目する（第7～第13段落）

芸術作品をすでに形作られた完成形としてのみ眺めてはいけない。芸術作品は、制作過程の中から刻々と姿を現して出てくるものである。素材としての自然との対話を通して芸術家は自身が描こうとしている物の本質を会得し、また同時にその過程を通じて人為ではとらえきれない自然の深みを発見していく。さらに、その自然は探求すれば探求するほどその奥行きを増していく。その点で芸術は未完成なものといえる。

芸術作品は芸術家の意図だけでは決まらず、制作過程には予知することのできない部分が付け加わる。制作過程で最初の意図・計画が変わることも大いにあるし、創作過程を通して新たな着想が生まれることもある。制作途中での人生経験さえ創作に影響してくることもある。作品がどのようなものとして出来るかは、芸術家が実際に素材と取り組み、創作努力をしていく過程の中からしか把握することができない。また、その過程を通じて芸術家自身も成長していく。（芸術活動自身が世界の創造過程の一部であるため、芸術的創造は自然や人間の歴史の創造過程と変わらないといえる。）

芸術作品の中には、その素材のほかにも芸術家の人生、歴史、直接そこには表現されていないあらゆる出来事が集約されている。あらゆる出来事の結節点のところに創発してくるものが創作といわれるものである。その創発の瞬間は、過去のあらゆる出来事を含んでいるとともに、次の新しい創造を含んでいる。芸術作品の創作は、あらゆる出来事の出会いから現われ出てくる一回限りの歴史である。その意味で偶然のもつ意味は深い。

百字要旨

芸術作品の創作は、人間の構想通りにはいかず、素材や偶然に左右されるものであり、また、芸術家の来歴や創作過程でのあらゆる瞬間から創発され、

その過程で芸術家自身が成長していくため、再現不可能なものである。（100字）

用語解説

― 出典：『広辞苑 第六版』（岩波書店）（ただし、※のついた語義は解説執筆者による）

経験的 ※経験によって得られるさま。経験により得られた知識・感覚を重視するさま。

※本文「経験的な素材」は「材料の個性に精通していること」と対比されるモチーフとして、理論から演繹されたことではなく、実際の観察から推論したに過ぎない知識・感覚を芸術家が素材に適用することが想定された表現になっている。

結節点 つなぎ合わされた部分、結び目。

創発 ※要素間の相互作用が全体に影響を与え、その全体が各要素に影響を与えることで新たな秩序が形成される現象のこと。

設問解説

問一

解答 作品は人間の構想力と力量だけでは作られず、粘土の素材、温度や湿度の条件など自然・偶然に随順しながら創造されるという特徴。

（60字）

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 I（第1～第6段落、特に第1～第2段落）

解説

傍線部は陶芸のどのような特徴を述べているか、という問題である。傍線部の単純な換言が求められているわけではないことに注意したい。傍線部は事実上「『陶芸は、自然の中にみずからの行為を参入させて、自然の方から作品を作り出す芸術だ』とはどういうことか」と問うているに等しい。なぜ出題者はこのような問い方をしたのか。結論から言えば、傍線部が比喻(暗喩)を含んでいるからだと考えられる。自然の中にみずからの行為を参入させるというのも文字通りでは意味がよくわからないし、自然が陶芸作品を作り出すということは基本的にありえない。つまり比喩である。単に「どういうことか」と問うのではなく、「どのような特徴」かを問うことで傍線部を文字通りに捉えるのではなく、ある程度距離を取って、客観的に比喩を処理するようにとの配慮がなされていると考えられる。

まず、この傍線部を含む第2段落は、「陶芸は、その最も適切な例である」で始まっており、「この段落全体で一貫して陶芸という具体例について述べられている。第1段落では、芸術一般についての話題であり、芸術家は対象をよく見て、自分の感性でそれを構成し、作品を作っていくが、必ずしも自分の構成通りに作品を作り上げられるわけではないと述べられていた。つまり、陶芸の例は、「作品作りは必ずしも自分の構成通りにはいかない」ということを「最も適切」に表しているものであり、陶芸の特徴としてこのことは当然含まれることになるはずである。そして、第2段落でそれは陶芸に適合的な表現で、また詳細に述べられるとも推測される。ちなみに第3段落に先に目を通すと、再び芸術一般について述べられており、この一般的な箇所を用いて陶芸という具体的なものの特徴についての説明をするのはストレートではない。

そこで第2段落を読むと、同じようなことが何度も繰り返し表現を変えて

述べられていることに気がつく。本問はこのように複数羅列された相同表現からいくつかを内容的に重複しないように取捨選択し、一般的な表現に処理することが求められるのである。このように書くとき非常に高度な問題のように思われるかもしれないが、これはある一定範囲(ここでは第2段落)の整理・要約という現代文の問題で極めて頻出の、また基本的な設問なのである。このような典型的な問題は確実に解けるようになってほしい。では、第2段落の一文一文が何を述べているか慎重に検討し、そのエッセンスを抽出していこう。

第2段落第2文の「単に自分だけの構想力と力量だけで作品を作ろうとは思っていない」は、基本的に第1段落の「自分の構想通りに作品を作り上げられるわけではない」という内容に、「力量」という概念を付け加えただけである。自分の構想力・力量だけでは作品が作られないのであれば、ほかに何によって作品が作られるのだろうか。第3文をみると、どんな作品ができるかは素材や条件に依るところがかなり大きいと述べられている。では、「素材や条件」とあるが、これらは具体的にはどういったことを指しているのか。第4文をみると、素材とは「粘土の組成や性質」、条件とは「火の温度の加減、湿度など、その時、その場の気候、風土など」のようなことを言っていることがわかり、そしてそれらすべてをひっくるめて「自然に任せねばならない部分が大い」と述べられているのである。第5文の「大自然の創造力に身を任せる」というのは、前文の「自然に任せる」を換言しただけである(ちなみに「ある意味で」というのは換言の接続詞として機能することが多い)。第6文の「自然に随順になったとき」に素晴らしい作品ができるというのも、また第7文の「地水火風、天地人すべてが協働して想像されてくる芸術なのである」というのも、基本的には「自然に任せねばならない部分が大い」(第4文)と同内容である。第8文では、素材と条件、それをひっ

くるめた「自然」(あるいは「自然の創造力」)に、人為では制御しきれない、偶然に任せねばならないという形容を加えている。それを踏まえて、第9文では「自然」を「偶然」と言い換えて第4文と同一内容が述べられ、第10文では、そうした偶然の効果・成果を煙たく思うのではなく、喜ぶのが陶芸であると述べられている。つまり、この第2段落で言われていることは基本的に一つで、「自然に任せねばならない部分が大きい」ということである。それを詳説すれば、人為では制御しきれない、偶然ともいえる、素材や条件、すなわち自然に任せねばならない部分が大きいということである。基本的にこの内容をまとめれば本問の解答となることは間違いない。では、傍線部との対応、比喩の処理という観点を考慮しながら、解答のかたちに内容をまとめ、補充していく。

まず、「人間の構想力・力量だけでは作品は作られない」という大前提が必要であり、傍線部の「自然の方から作品を作り出す」という箇所を説明するうえで、この「自然」が素材と条件を指すものであることに言及しなければならぬ。素材・条件がそれぞれのようなものか具体的に説明できるとなおよい。そして、この自然が偶然とも等置されるものであることをできれば加えたい。残るは、傍線部の「自然の中にみずからの行為を参入させて」という箇所である。「参入」というのは加わることであり、ここでは芸術家が手を加えるといった程度の意味だと思われるが、「参る」という字が入っていることからわかるように、原義としては高貴な人のもとを訪問することであった。筆者があえて「参入」という言葉を用いたのは自然に対して畏敬の念があるニュアンスを表現するためなのかもしれない。神聖な自然に手を加えるというのは、本文でいうところの、人間が「構想力」・「力量」によって作品を作ろうとするということである。ただこのことははっきりいって当たり前のことで特筆すべき特徴でもない。本問で用意されている字数が短

いため、この要素については、「人間の構想力と力量だけでは作品は作られず」などと、後半の「自然の方から作品を作り出す」という要素を修飾させる程度に留めるのがベターであろう。

なお、第2段落第10文の「偶然の効果や成果を喜ぶ」という要素を解答に入れなかったのは、傍線部中にはそれについて言及した箇所がなかったからである。むしろ、これも立派な陶芸の特徴ではあるためこの要素を入れたところで誤りではなく、したがって減点されることはないであろうが、傍線部中に言及がない以上、優先度が低いと言わざるをえない。

最終的な解答は、「人間の構想力と力量だけでは作品は作られず、粘土の素材、温度や湿度の条件など自然・偶然に随順しながら創造されるという特徴。」というようになる。

《解答要素》

- ① 「人間の構想力と力量だけでは作品は作られず」
- ② 「粘土の素材、温度や湿度の条件など自然・偶然に随順しながら」
- ③ 「創造される」

※ 解答は「〜という特徴。」か、あるいは「〜ということ。」と締めくくること。

《参照箇所》

- ① 第2段落2文目
- ② 第2段落3・4・6・8・9文目
- ③ 第2段落2・11文目(傍線部)

問二

解答 自己完結している素材の個性によって芸術家が受動的に創作を制限

され、また芸術家が素材に精通して能動的に働きかける中で新しい形は生まれてくるということ。(74字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 I (第1～第6段落)

解説

「どういふことか」というストレートな傍線部説明の問題である。「**どういふことか**」の問題では、**自分の解答が傍線部と完全に等置できるようにすることが重要である**。傍線部をみると、「この能動と受動の相互作用」とあり、傍線部中に指示語があることがわかる。**傍線部中の指示語はその指示内容を明確化する、というのは内容説明の問題では基本の動作である**。この指示語の直接の指示内容は、直前の「芸術家が材料の中に身をもって働きかけるとき、材料そのものが応答してくる」という箇所である。芸術家にとって、材料に「身をもって働きかける」というのは能動であり、素材が「応答してくる」というのは受動的なものといえる。表面的には能動・受動の指す事柄はおさえられたが、「芸術家が素材に身をもって働きかける」、「素材が応答してくる」とはどのようなことなのか、その内容がいまいち判然としない。ここで、**第3段落でわかりやすく述べられたことが第4段落で抽象的にまとめられる、という流れなのではないか、という推測を働かせたい**。そこで、第3段落へ遡行してみると、第5文で「芸術家は常に素材から制限されている」、第7文で「素材は、芸術の形成作用に対して抵抗もするが、形作りを助けもしてくれる」、第8文で「素材は素材ですでに形作られており、(中略)それ自身の性質をもっている」と芸術の受動的な側面についての言及が見られる。これらを要約すると、素材はそれぞれすでに形作られており、自身の性質をもっていて、そうした性質は芸術家に制限を与え、形成作用に抵抗もするが、

手助けもしてくれる、ということである。また、第9文では、素材自身がそれぞれ性質をもっているために、芸術家が「素晴らしい作品を作るには、素材の個性に精通していなければならない」と述べられている。これは、前文までと同様に、結局素材の個性に縛られるという意味で受動的な側面のようにも思えるが、「素材の個性に精通」というのは芸術家による能動的な行為なしにはありえず、その意味では能動的な側面とも捉えられる。そして、「素材の個性に精通して」という内容は、「材料の中に身をもって」という内容と相関性が高い。そこで、能動的側面である、「材料の中に身をもって」という箇所の換言には「素材の個性に精通して」を使う方向で考える。傍線部の直接的な相同表現の第一候補である第4段落第2文の「芸術家が素材の中に身をもって働きかけるとき、素材そのものが応答してくる」という表現は、「働きかける」という能動から「素材からの応答」という受動へという流れであるが、遡行した第3段落では、まず素材の性質による制限という受動からその性質への精通から作品作りという能動へ、という流れになっており、解答文を作成するうえで「素材からの制限」を「素材からの応答」と等置するのは難しいように思われる。その媒介項があるかもしれないという期待を持ちつつ、第5段落に目を向けると、第2文に「形も素材に働きかけ、素材を変貌させるが、同時に、素材の方も形に抵抗し、形を変えていく」とあり、**能動と受動が同時進行であることがわかる**。これを踏まえ、本解答では能動と受動を並列することにした。また、第3文では「芸術家の素材への働きかけと素材からの応答が芸術家の経験となり、その経験から新しいものが生み出される」とあり、これが実は傍線部とかなり近い構造をしていることがわかる。傍線部の「創造的な形は生まれてくる」の換言としてこの箇所を用いたい。なお、本解答ではどちらが受動でどちらが能動かを明示した。傍線部中の言葉はできる限り解答には残さないのが望ましいが、傍線部と解

答で要素の順序が異なっていることもあり、わかりやすくするために用いた。(どちらが能動・受動かが自明にわかるような表現ができていれば、能動・受動といった言葉は不要である。)

最終的な解答は、「自己完結している素材の個性によって芸術家が受動的に創作を制限され、また芸術家が素材に精通して能動的に働きかける中で新しい形は生まれてくるということ。」というようなものになる。

《解答要素》

- ① 「自己完結している素材の個性によって」
 - ② 「芸術家が受動的に創作を制限され」
 - ③ 「芸術家が素材に精通して」
 - ④ 「能動的に働きかけるなかで」
 - ⑤ 「新しい形は生まれてくる」
 - ⑥ ①+②と③+④が並列されて、⑤につながる構造の解答になっている。
- ※ 解答は「〜ということ。」と締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第3段落8文目
- ② 第3段落5文目
- ③ 第3段落9文目
- ④ 第4段落3文目
- ⑤ 第5段落3文目

問三

解答 伊豆に至るまでの不安・動揺・無力感、そういう孤独を歌に託すしか

なかった実朝の心情すべてが含まれていると理解すべきである。

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 II (第7～第13段落、特に第12段落)

解説

傍線部が「一見、単純な叙景歌のようにみえる」とあるが、「筆者は実朝の歌をどのように理解すべきだと考えているか」という問題である。単純な叙景歌ではないのだろうと容易に想像できるような流れである。予想通り、直後の文は「しかし、」で始まり、「そこ(＝実朝の歌)には、お供を連れて箱根越えをし、急に開かれてきた伊豆の海の沖を眺めた実朝のそれまでの来歴すべてが含まれているのである」と述べられている。つまり、表面的には何の変哲もない叙景を描写しただけの歌であるようにみえるが、実は、実朝のそれまでの来歴すべてが含まれている歌だということである。したがって、この歌はどのように理解すべきだと筆者は考えているかと問われれば、当然ながら実朝のそれまでの来歴すべてが含まれていると理解すべきだという方向性になる。しかし、これだけだと「来歴すべて」とは何なのかよくわからず、解答としては不十分である。では、実朝のそれまでの来歴とは具体的にどのようなものだったのだろうか。第12段落を読み進めてみると、第6文では、臣下の北条氏の絶えざる不穩、若年の將軍としての不安・動揺・無力感、そういう孤独を歌に記すことしかできなかった実朝の心情すべてが含まれていると具体的に述べられている。そして第7文・第8文では、そのような心情がいかに風景描写の中に読み込まれているかが説明されている。よって、第6文の内容を簡潔にまとめるとで実朝の来歴すべてが読み込まれていることを説明すれば解答となる。(傍線部を含む箇所は「例えば」で始まる具体例であり、何の具体例かといえば、第3文の「一つの作品の中には、

(60字)

直接そこには表現されていない他のあらゆる出来事が集約されている」ということの具体例であった。この「あらゆる出来事」とは、第2文でいうところの「(芸術作品の)素材はもちろんのこと、芸術家の人生、歴史、すべての出来事」である。本問の解答を見ると、正しくこれに適合する内容となっていることがわかる。

したがって、解答は、「伊豆に至るまでの不安・動揺・無力感、そういう孤独を歌に託すしかなかった実朝の心情すべてが含まれていると理解すべきである。」というようなものになる。

《解答要素》

- ① 「伊豆に至るまでの」
- ② 「不安・動揺・無力感」
- ③ 「そういう孤独を歌に託すしかなかった実朝の心情すべて」
- ④ 「含まれている」

※ 解答は「〜と理解すべきである。」または「〜と理解すべきと考えている。」と締めくくること。

《参照箇所》

- ① 第12段落5文目
- ② 第12段落6文目
- ③ 第12段落5・6文目
- ④ 第12段落5・6文目

問四

解答

芸術作品の創作は、素材や芸術家の来歴に加えて創作過程での出来事一瞬一瞬から創発され、その過程で当初の想定から変わったり、新た

な着想が生まれ、また芸術家自身が成長していくものだから。(90字)
 難易度 ★★★★★

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 II (第7～第13段落)

解説

「〜と筆者が考えるのはなぜか」という問題である。前問が第12段落の後半を要約しただけのやさしい問題だったのに対して、この問題はなかなかハードである。まず第7段落から第11段落に至り、ここまで一切解答要素として用いた箇所がないことから、解答要素の選定が困難かもしれない。また、傍線部直前の第13段落1・2文目を見ても、相同表現と思われることがあるだけで、「なぜか」を説明しているような箇所は見つからない。となると、当然第7段落から第11段落の内容を一つひとつ確認していくほかない。各段落の要約は段落解説で行っているのので、ここでは実践的に解答要素を見つけていくプロセスを再現していくことにする。

本問は、なぜ「芸術作品の創作は、あらゆる出来事の出会いかから現われ出してくる一回限りの歴史なのである」と筆者は考えるのか、が問われているが、この傍線部という命題に対して「なぜか」と問えるポイントは主に二つであると考えられる。一つは、なぜ「芸術作品の創作は、あらゆる出来事の出会いかから現われ出してくる」といえるのか、そしてもう一つは、なぜ「芸術作品の創作は、一回限りの歴史」であるといえるのか、である。(出題者が長い傍線を引いて、その全体に対して「なぜか」と問っている以上、傍線部を分解して二つをまったく個別に考えるのは危険であり、その連関、すなわちその二つがどのようにつながっているのかを考えなければならないことはいくらでもない。)

前からざっくり確認していくと、第7段落で制作過程に着目することの重

要性が述べられ、第8段落では芸術家は制作過程を通じて、自分の描こうとしている物を自覚し、素材の「物の本質」や「自然の深み」を発見すると述べられ、第9段落では、探求すればするほど「自然の深み」は増していくために芸術には終わりがなく、芸術は未完成なものだと述べられている。ここまでで、芸術作品の創作が「あらゆる出来事の出会いから立ち現れ出てくる」、「一回限りの歴史」と言える理由を説明しうる要素はなさそうである。

第10段落では、芸術作品は芸術家の意図だけでは決まらないばかりか、芸術家自身の当初の意図や計画が変わってしまうこともあり、制作途中の人生経験さえも創作に影響してくる、と述べられている。第11段落では、冒頭で再び「過程」の重要性が述べられたのち、「制作過程の各々の瞬間ごとに、新たな創造が行われている」とし、制作過程は探究の過程であり、さらに、その過程は芸術家に苦しみを与えるだけでなく、成長する契機ともなると主張する。第12段落では、「創作された芸術作品の中には、その素材はもちろんのこと、芸術家の人生、歴史、すべての出来事が含まれている」と述べられ、その具体例として源実朝の歌が挙げられている。そして、第13段落では、創作とは「あらゆる出来事の結節点のところに創発してくるもの」であり、「その創発の瞬間は過去のあらゆる出来事を含んでいるとともに、次の新しい創造を含んでいる」と述べられている。

この第10～13段落は同内容が繰り返されながらも解答要素が散りばめられている。まず一つ目のポイントにかかわるところで内容を整理すると、創作された芸術作品は、素材や芸術家の人生経験、歴史、すべての出来事の影響を受けており、芸術作品の創造もまた出来事で、制作過程の各々の瞬間ごとに新たな創造が行われている。これらを総合して考えると、単に素材や、芸術家の人生経験・歴史といったマクロな出来事に留まらず、制作過程の各々の瞬間という直近のミクロな出来事までも芸術作品の制作に影響を与えてい

るとまとめられる。それゆえに「芸術作品の創作は、あらゆる出来事の出会いから現れ出てくる」といえるのである。(厳密に「あらゆる」であることを示すには、そこに含まれるすべての要素、すなわち少なくとも有史以来の無数に存在する、数え上げることが不可能な出来事が一つずつ適合することを示さなくてはならず、それは原理的不可能性をはらむものである。また、無数に存在する出来事をすべて含むような集合を構想し、そのような集合が全体として条件に適合することを示すという方法もあるが、本文ではそのような集合の構想は言及されおらず、現代文ではこの方法は単純に換言(同値変形)をするだけで実がないものになってしまうことがしばしばある。)そうした過程の瞬間瞬間が影響を与えた結果、当初の意図や計画が変わったり、新しい着想が生まれたりするわけである。こうして一つ目のポイントについては説明ができた。

では次に二つ目のポイントについて考えよう。ここでの「一回限りの歴史」というのは、芸術作品の創作は、時系列と同様不可逆で、やり直しができない、再現が不可能といった意味だと考えられる。ではなぜ再現不可能なのか。まず、一つ目のポイントで挙げたように、制作過程の一瞬一瞬が作品の制作に影響を与えてしまうため、その一瞬一瞬まで模倣するのは事実上不可能であるといえる。そして、もし仮に結果がまったく同様になるように制作過程を再現したとしても、**芸術家自身が過程を通じて成長する(第11段落5文目)ため、どうしても過程、それに対応する結果は変わってきてしまうのだ。**(もっと厳密性を高めた仮定を置き、成長を踏まえないような仕方でも制作過程を再現したと仮定しても、芸術家の内面としては「成長をなかつたことにより」という歯止めをかけている点でやはりかつての制作過程の完全再現は不可能である。)

さて、二つの「なぜ」に説明がついた。では、その二つの連関はどうなっ

ているのかを最後に検討してみる。これらは重複していることが判明した。「制作過程の一瞬一瞬が作品の制作に影響を与えてしまう」ために、「あらゆる出来事の出会いは現われ出てくる」といえ、再現できない「一回限りの歴史」だといえるわけである。しかし、「制作過程を通じて芸術家自身が成長する」という要素は「あらゆる出来事の出会いは現われ出てくる」とと直接的には関係ない。傍線部を改めて確認すると、「あらゆる出来事の出会いは現われ出てくる」と「一回限りの歴史」とは、前者が後者にかかっているというだけで、それ以上の情報はないため、本解答でもあまり踏み込まず、傍線部の要素に対応する順番で、並列的に要素を配置した。

したがって、最終的な解答は「芸術作品の創作は、素材や芸術家の来歴に加えて創作過程での出来事一瞬一瞬から創発され、その過程で当初の想定から変わったたり、新たな着想が生まれ、また芸術家自身が成長していくものだから。」というようなものになる。

《解答要素》

- ① 「芸術作品の創作は、」
 - ② 「素材や芸術家の来歴に加えて」(③「さえも」が強調として機能するための前提)
 - ③ 「創作過程での出来事一瞬一瞬から創発され」
 - ④ 「その過程で当初の想定から変わったたり、新たな着想が生まれ」
 - ⑤ 「また(その過程で)芸術家自身が成長していく」
- ※ 解答は「〜から。」と締めくくると。

《参照箇所》

- ① 第13段落3文目(傍線部)
- ② 第12段落2文目、第13段落2文目

- ③ 第11段落3文目(第13段落1文目)
- ④ 第10段落3・4文目
- ⑤ 第11段落5文目

(昆野祐己、千代田麻理、森慎太郎)

解答

問一 イ 仰ることはできなかったでしょうに。

ハ どうしてそのようには見えないのか。

ホ なるほど、それも有り得ることだ。

問二 それはまた、時柄がいはせたるなめり。(18字)

問三 「時から」という言葉に、時節がらという意味と人物の時柄との二つ

を掛けた当意即妙な返答だったから。(48字)

問四 自分の字の汚さを笑われるのが怖いので、歌を詠む前に逃げてしまい

たいという心境。(39字)

本文読解

前書きの読解

たいした情報はなさそうだ、と思ってしまうような短い前書きだが、重要なことが書かれている。それは、『枕草子』からの引用だということ。『枕草子』は随筆なので、作者清少納言の一人称視点で語られるということが読み取れるのだ。これをわかってから読解に入ることができるかどうかで読みやすさは全然違ってくる。

通読

第1段落

◎注を確認。一条天皇の手紙を定子に届ける使者として、信経がやってきた。

◎「褥」ってなんだろう。注を見ると「綿入れの敷物」と書いてある。座布

団みたいなものか。

◎信経はなぜ用意してもらった座布団を押しつけて座ったのだろう。清少納

言も不思議に思って「たが料ぞ」と尋ねている。

★「たが料ぞ」を初見で正しく解釈するのは難しい。信経の返事から、座布団をよけた理由を聞いたのだろうと推測できれば十分。「たが」には「誰の・誰が」、「料」には「目的・理由」といった意味があるので、訳すと「誰のため(にそうするの)か」となる。

◎注から、清少納言は気の利いた洒落を言ったのだということがわかる。「敷物が氈褥で、その氈褥で洗足ができるじゃない」というおやじギャグ。

◎うまく言ったと満足げな清少納言の様子が想像できるが、信経は、自分が足跡のことを言わなければその洒落は生まれなかったのだと言い張る。ずうずうしい人だなあ。

第2段落

◎「はやう」||「昔・以前」に注意！ 場面が変わっている。そしてこのエピソードの登場人物は名高い下仕えのゑぬたきと、蔵人の時柄。

◎「これやこの」は現代でいえば「これが例のくか！」というフレーズ。時柄はゑぬたきに対して「有名な下仕えには見えない」と言った。失礼な人だ。

◎これに対しゑぬたきの返答。「時からに」そのように見える…蔵人の名前は「時柄」…そうか、これも洒落の話か！ 素晴らしい返答、さすが名高い下仕え。

★「かたきに選りても」は「相手を選んでも」といった訳になるが本番で正しく訳するのは難しいかもしれない。「さることはいかでかあらむ」は、「いかで」に係助詞「か」がついて反語の意味。あり得ないほどに素晴らしい返答だったということ。

★「さりけるなめり」||「さありけるなるめり」。「さ」は直前の「興あるこ

とに」を受けている。今日までこのように伝えられるということは、それほど素晴らしい対応だったのだろうという内容。

第3段落

◎信経の主張は、書や歌が素晴らしいとしても、それはお題のおかげだといふもの。多ぬたきの洒落も、時柄のおかげらしい。無理矢理な主張だなあ。

◎清少納言は、自分の洒落を褒めてもらえなかったことが少し不満なのだろうか。「お題が大事だというなら、私がお題を出すから歌を詠んでみなさい！」という具合だ。

★「まかり〜」で「〜します」と訳す。信経は、定子から一条天皇への返事が出てきたタイミングで「恐ろしい」と言って逃げてしまった。

◎そのあとで信経の字の汚さを暴露したのは、周りに仕える女房か誰かだろう。「仮名」は現代と同様「ひらがな」、対する「真名」は「漢字」のことだったな。信経は字の汚さがばれるのが嫌で逃げたの。

設問解説

問一

解答

《合格答案》

イ 仰ることはできなかつたでしょうに。

ハ どうしてそのようには見えないのか。

ホ なるほど、それもあることである。

《満点答案》

イ 仰ることはできなかつたでしょうに。

ハ どうしてそのようには見えないのか。
ホ なるほど、それも有り得ることだ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

イ

品詞分解すると、「え／＼のたまは／＼ら（打消の助動詞「ず」の未然形）／まし（反実仮定の助動詞「まし」の終止形）」となる。ポイントは、「え／＼打消」と「…ましかば／まし」の訳。「え／＼打消」は「〜できない」という不可能の意味。助動詞「まし」は、よく「未然形＋ば／まし」や「…ましかば／まし」の形で用いられ、反実仮定「もし…だったら／＼だったろうに」の形で訳す。本問も、傍線部直前に「信経が／＼ましかば」とあるので、反実仮想である。これで、全体の構造は、「〜できなかつたろうに」と決まった。最後に「言ふ」の尊敬語「のたまふ」を訳して、「仰ることはできなかつたでしょうに」となる。

ハ

品詞分解すると、「など／＼さ／し／も／見えぬ（打消の助動詞「ず」の連体形）」となる。「など」は「なぜ／＼か」と訳し、疑問の意味も反語の意味もとり得るので、本問ではどちらになるか吟味する必要がある。ここで、直後に「いらへに、『それは、時からにさも見ゆるならむ』とあるように、多ぬたきが時柄に返答をする形式で会話が進むことから、疑問の意味であると判断しよう。「な」は指示語で、「それ、そのように」の意味。強意の副助詞「し」はしばしば係助詞「ぞ」「や」も「と結びついて」「しも」「しぞ」という形で文

中にみられるが、無理に現代語訳に訳出する必要はない。以上をまとめて「うしてそのようには見えないのか」となる。

「さ」の指し示す内容は直前「これやこの高名のゑぬたき」の部分で、これを補うと、「どうして、あなたは（うわさに聞く）名高いゑぬたきのように見えないのか」となり、文脈にも適合している。

ホ

品詞分解すると、「げに、/さ/も/ある/こと/なり（断定の助動詞「なり」の終止形）」となる。「げに」は、何かに納得したときなどに「なるほど・本当に」という意味で用いられる言葉。「さ」は傍線部ハと同様に指示語である。よって直訳すると、「なるほど、それもあることである」となるのだが、「こ」での「ある」は、信経の発言を受けて、作者清少納言が「それも一理ある、あり得る」という意味で発したものだとして解釈して、「なるほど、それもあり得ることだ」とより現代語らしく直せば《満点答案》になる。

問二

解答 それはまた、時柄がいはせたるなめり。(18字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 特殊型

解説

傍線部「かへすがへすいひし」にうかがえる信経の心情はどのようなものかを解釈し、それが表れている箇所を探す、という手順で解く。

「繰り返した言った」のだから、信経はこの時言ったことを強く伝えたかったはずである。よって、この発言内容「これは、御前にかしこうおほせらるるにあらず。信経が、足形のことを申さざらましかば、えのたまはざらまし」

に信経の心情が反映されていると推測できる。信経は、「せんぞく料」の洒落について、作者が素晴らしいからではなく、足形を話題に出した自分のおかげで生まれたのだと主張している。以上を踏まえると、どんなに機転の利いた洒落も、お題を提供した人のおかげで生まれる、という信経の考えを反映した「それはまた、時柄がいはせたるなめり」が解答となる。

問三

解答

《合格答案》

「時から」という言葉に、時節がらという意味と人物を指す時柄との二つの意味を掛けた返答をしたから。(48字)

《満点答案》

「時から」という言葉に、時節がらという意味と人物の時柄との二つを掛けた得意即妙な返答だったから。(48字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

問題文のいう「ゑぬたきの時柄に対する返答」とは、「これやこの高名のゑぬたき。などさしも見えぬ」という時柄の問いかけに対する、ゑぬたきの「それは、時からにさも見ゆるならむ」という返答のことである。そして、この返答が「上達部、殿上人まで、興あることにのたまひける」という評価を受けているということとはつまり、ゑぬたきの返答が面白いとよい評判が広まったのだということが読み取れる。では、何が面白かったのか。「こ」で、

作者がこの話をする前に信経に対してうまい洒落を返したこと(せんぞく料の洒落!)や、ゑぬたきの発言の「時から」という語句に注目して、ゑぬた

きも洒落で返したのではないか、そしてこの設問は受験生がその洒落を理解できているかを問うているのではないかと気づいてほしい。

「時から」には「時節がら」という意味と、「時柄」という人名が掛けられている。歴史的仮名遣いなので、この場合濁点の有無は気にしなくてよい。

「これがあの名高い多岐たきか。どうしてそのようには見えないのか」と言った時柄に対し、「それは、時節がら時柄様にはそのように見えたのでしよう」と返答した、という具合である。この洒落の意図と、その洒落が素晴らしかったというプラスの評価の両方を盛り込めば《満点答案》になる。ちなみに、《満点答案》では、「せんぞく」の注で用いられている「当意即妙」という表現を採用した。解答のヒントはどこに潜んでいるかわからない！

問四

解答

《合格答案》

自分の字の汚さが露呈しないよう、歌を詠む前に逃げてしまいたいという心境。(36字)

《満点答案》

自分の字の汚さを笑われるのが怖いので、歌を詠む前に逃げてしまいたいという心境。(39字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

二重傍線部「あな恐ろし。まかり逃ぐ」の訳は、「ああ恐ろしい。退散します」となる。信経は何が恐ろしくて退散すると言ったのか、その理由をまとめればよい。心情・理由を説明する問題は傍線部の直前から根拠を探すの

が常套手段だが、直前のやり取りでは、作者が「さは、題出ださむ。歌詠みたまへ」と言ったのに対し、信経が「いとよきこと」と作者の提案に賛成していることから、信経が逃げようとする理由が読み取れない。

そこで、本問では直後に目を向けてみる。信経が出て行ってしまったあと、「いみじう、真名も仮名もあしう書くを、人の笑ひなどすれば、隠してなむある」という発言がある。「漢字も仮名もとても汚く書くのを、人が笑うので、隠しているのですよ」というこの発言内容から、字の汚さを笑われるのが怖いということ、それゆえ歌を詠みたくないということを解答に含めれば《満点答案》となる。この発言時、信経がその場にいないことを考慮すれば、発言者が作者だとするとこの発言は独り言になってしまう。作者と信経のほかに誰か(女房と考えられる)がいて、その人の発言だと考えるのが自然。この最後のせりふは解答の決定的な根拠となるが、その主語を正確に読み取るのは難しかった。しかし主語を捉え違えていてもなんとか答案をつくることはできるので、本番であればそこまでこだわる必要はないだろう。

本文解説

現代語訳

雨がずっと降り続ける季節、今日も降っているが、(一条天皇の手紙を中宮定子に届ける)御使者として、式部の丞信経が参上した。いつものように梅が出ているのを、(信経は)普段よりも遠くに押しやって座ったので、(私が)「誰の為にそうするのですか」と言つと、(信経は)笑って、「このような雨の日に(梅に)上がりましたら、足跡がついてとても不都合なことに汚くなってしまおうでしょう」と言うので、(私が)「なぜですか。(髭髷だけに)

洗足料になるでしょうに」と言つと、(信経は)「これは、あなたがうまく仰つたというわけではないですね。この信経が、足跡のことを申さなかつたら、(あなたはそのように)仰ることはできなかつたでしょう」と、繰り返し言つたのは、面白かつた。

「昔、中後の宮に、ゑぬたきという、有名な下仕えがいました。美濃の守のときに亡くなった藤原時柄が、蔵人だつたときに、下仕えたちがいる所に立ち寄つて、『これがあの有名なゑぬたきか。どうしてそのようには見えないのか』と言つたのだが、その答えに、(ゑぬたきが)『それは、時節がら時柄様にはそのように見えるのでしよう』と言つたこと、『相手を選んで、そのようなことがどうしてあろうか(〓そのような返事がどうしてできようか)』と、上達部、殿上人まで、面白いことだと仰つたそう。また、そうであつた(〓面白かつた)のでしよう。今日までこのように言い伝わっているのですから」と(私は)申しました。

「それはまた、時柄が言わたのでしよう。総じてお題があつてこそ、書も歌も素晴らしくなるのです」と(信経が)言うので、(私は)「なるほど、それも有り得ることだ。それでは、お題を出しましょう。歌をお詠みください」と言つ。とてもよいことですね。一首詠むのでは張り合いがないので、同じことならば、たくさんお詠みしましょう」などと言つたときに、(中宮定子から一条天皇への)「返信が出てきたので、」ああ恐ろしい。退散します」と言つて出ていったのを、「漢字も仮名もとても汚く書くのを、人が笑つので、隠しているのですよ」と言つのも、面白い。

用語解説

【例】 いつも・普段

【不便なり】 ①不都合だ②かわいそつだ

など どうして・なぜ

・反語として機能することもある

かしこし 素晴らしい・うまい

をかし 面白い・趣がある

はやう 昔・すでに

うす【失す】「自サ下二」 ①消える②死ぬ・亡くなる

くらうど【蔵人】 天皇の側近として宮中の事務や行事などに携つた役人

かんだちめ【上達部】 貴族の中でも最も高位の人々。三位以上の上流貴族

を指す

てんじょうびと【殿上人】 上達部より下の位で、殿上の間への出入りを許

された人々。四・五位の役人と六位の蔵人を指す

げに なるほど・本当に

まかる【罷る】「自三四」 退出する

あし【悪し】 悪い・みっともない・醜い

(松田朋佳、山崎恭子、市川裕圭)

2016年度 北海道大学 前期 国語

四 漢文（宋代の随筆）

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	20分	<p>蘇軾「書東臯子伝後」（東臯子伝の後に書す）からの出題。</p> <p>蘇軾は北宋の政治家・書家・詩人。北宋最高の詩人と称される。王安石の新法（大規模な改革）に反対したため、左遷され地方官を歴任する。詩風は繊細な感受性と、希望を失わない明るさ・ユーモア。個人的なおすすめ作品は、長いけれどやはり「赤壁の賦」。現代語訳だけでもいいから読んでみてほしい。蘇軾の魅力が詰まった作品である。</p> <p>「東臯子伝の後に書す」は、蘇軾と同時代の官吏・東臯子の伝記のあとがきとして書かれたものである。今回はその冒頭からの出題であった。</p>	<p>字数は189字。論理展開も丁寧で読みやすく、蘇軾らしいおしゃやかな文章だった。「私は世界一酒が飲めない。なのに、世界一酒を好む」「私は健康で下戸である。なのに、酒や薬を常備している」という「なのにおしゃれ」や、「一見』他人のため』に見えるかもしれないが、実は『自分のため』で</p>

傾向と対策
<p>ある」という「実はおしゃれ」がちりばめられている。それを感じられたら、より論理展開も追いやすく、作者の主張も読み取りやすかっただろう。</p> <p>問一・問二は北大頻出型の基本問題であった。歴史的仮名遣いについても常識レベルである。問三では、漢字の意味を考えたより柔軟な訳が求められた。書き下しに惑わされず、漢字そのものの意味をも必要に応じて考慮しなければならぬ。問四は、先述の「なのにおしゃれ」「実はおしゃれ」をおさえていけば容易であった。その文章の面白さ、というものを（まったく面白くないものもあるが）考えながら読むとよい。</p>

《この解説の使い方》

本文読解 「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワランク上の読み(☆)、脳内で把握された内容(▼)を適宜載せてある。

設問解説 設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

本文解説 「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名（作品名を書き下す場合を除く）のふりがなは現代
仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

解答

問一 A これがために

B おもへらく

E もつとも

問二 みにやまひなくしてこころにうれひなきにしくはなしと

問三 病気や心配事を抱えた人が私の前にいたら、私はどうして自分の楽し
みを味わいつくすことができるだろう、いやできない。

問四 病人が薬を服用し薬になれば作者も体が軽く感じられ、酒飲みが酔い
高揚すれば作者も愉快になるため、作者自身は必要としないが多量の
薬や酒を常備している。（73字）

本文読解

通読

予酒を飲むこと終日にして、五合を過ぎず。

▼一日飲んでも五合＝一升の半分も飲めない。

☆中国では時代によって、同じ単位でも実際に表す量は変わっている。基
本古い時代ほど表す量は小さい【参考】参照)ので、まあ飲めないほ
うだったんだろうなあ。

天下の飲む能はざる、予の下に在る者無し。

▼飲めないやつで、私より下の者はない。

◎「私が世界一飲めない、ってことか。さっき飲めないって言ってたし。

然れども人の酒を飲むを喜び、客の杯を挙げて徐に引くを見れば、

◎逆接「然れども」がこのあと生きてくるのかな。「徐」は「おもむろ」。
「徐行」とかに使われる字で、ゆっくり、ってこと。「引く」はよくわか
らないけど引つ張ってるんだろう。乾杯、ってしてゆっくり口元に引き
寄せる感じがな。

則ち予は胸中^A為^B之^Cに浩浩焉落落焉として、

◎注より、「浩浩焉＝広々としたさま」「落落焉＝こだわりのないさま」。
「則」だから時間差のない順接。傍線部Aは「之が為に」だろう。「之」
は前の文＝ほかの人がうまそうに酒を飲んでいるのを見る、を指してい
る。それによって浩浩焉落落焉ってことだろう。

酩^{かんてき}適^{てき}の味、乃ち客に過ぐ。

◎注より、「酩適＝酒を飲んで愉快になる」。「乃」だから「則」「即」とは
違ってギャップのある順接。「酒が飲めない私」が「客よりも愉快にな
る」っていうのは、ふつうに考えたら変だもんね。

☆「酩」は訓読みで「たけなわ」。寝もたけなわ、春たけなわなどのように
使う。「酉^{うま}が甘い」とできた漢字だ。

閑居^{かんきよ}に未だ嘗て一日として客無くんばあらず。

▼うちにはこれまでに一日も、客が来なかった日はない。

◎「毎日誰かしら来る。「未十無」で否定が二つあるから二重否定。わざ

わざと二重否定を使うことは、強調したいところなんだろう。

客至れば、未だ嘗て置酒せずんばあらず。

◎注より、「置酒」酒を出して「ちそうする」。

▼客が来れば、これまでに酒を出して「ちそうしなかったことはない。

◎「客が来れば必ず酒を出す。「未十不」で否定が二つあるから二重否定。

ここも強調だな。客が来たら必ず酒を「ちそうするなんて、まめだなあ。

自分は飲まないのに。

天下の飲むを好む、亦た予の上に在る者無し。

▼世の中で酒を飲むことを好むのも、また私以上の者はいない。

☆なるほど、2文目の「私は世界一飲めない」にかぶせてきてるんだな。

いやーやっぱり蘇軾、おしやれだなあ。

常に^B以為人の至楽、莫^C若身無病而心無^D憂。

◎「至」は「至上」かな。傍線部Cは至上の楽しみを表しているんだろう。

字面的に、「身無病」と「心無憂」が見えるから、どっちもいいことだ

し、たぶんこの二つが「至楽」の要素なんだろう。

我は則ち是の二者無し。

▼私にはこの二者がない。

◎「無」はさっきの「身無病」「心無憂」の「無」といっしょかな。つまり

蘇軾は至楽の状態なのか。いいねえ。

然れども、人の是れ有る者、予の前に接すれば、則ち予安くんぞ其の樂しみを

全うするを得んや。

◎「然れども」逆接きた！ 話が展開するぞ！ 前後の文脈的に、自分は

幸せでも、ほかの幸せじゃない人が目の前にいたら、テンション下がる

なーってことだろう。

故に至る所常に善業を蓄へ、求むる者有れば則ち之を与ふ。

▼だからいたるところに業を蓄え、欲しがる人がいたらあげちゃう。

◎自分はいらないのにね。第1部の酒の話と似てきたぞ。

而して^E尤酒を醸^{かも}して以て客に飲ましむるを喜ぶ。

▼そうして、特に、酒を醸造して客に飲ませるのを喜ぶ。

◎お、第1部の話だ。

或^{あるひと}曰はく、「子病無くして多く業を蓄へ、飲まずして多く酒を醸す。己を

勞して以て人の為、何ぞや」と。

◎自分が苦勞して人のために業を蓄えたり酒を醸造するのはどうして、と

聞かれている。ここでの「為」の送り仮名は「設問の都合」で省略され

てるっぽいけど、「為にするは」だろう。

予笑ひて曰はく、

☆これは秀逸な答えがくるパターンだな。

「病む者業を得れば、吾之が為に体軽く、飲む者酒に困すれば、吾之が為に

酣適す。

◎注より、「困於酒」酒に酔いつぶれる」。さっきからの主張と一緒だ。さ

つきも、他人が不幸だったら自分の幸せを味わいつくせないって言うって
たもんね。注より、「困於酒」酒に酔いつぶれる。「それにしても「困」
がどうして酔いつぶれることになるんだらう。

☆『論語』子罕篇に「不為酒困」という言葉があり、「酒の困れを為さず」と書き下す。「困」の字は漢文ではよく「困くしむ」と読むけど、「こ」では、「酒に乱れる＝酔いつぶれる」と取ったほうがいいのかな。

『蓋し専ら以て自らの為なり』と。

◎人が気持ちよくなることを、人のためにしているのではない。自分が気持ちよくなることを自分のためにやっているだけだ、ってことが。

☆やっぱりおしやれだなあ。

設問解説

問一

解答 A これがために B おもへらく E もつとも

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 漢字の読み

解説

問一は三問からなっている。傍線部はいずれも漢文を読むうえで常識としてよいほどのものである。本文を読みながらすらすらと読めてほしい。だが、ときどき、なぜか今回に限ってそうもいかない、ということがある。そんなときのために詳しい解説を書いてみた。

A

「為レ之」と親切にレ点までつけてある。「為」は非常にたくさん読める。意味をもつ漢字であり、傍線部Aにしても、考えられる読み方は「これガためニ」「これヲナシ」「これヲをさメ」「これヲつくり」「これトなり」「これたり」……とたくさんある。

絞り方はいろいろあるだろうが、その一つに、それぞれの読み方をした場合に「之」という指示語が何を指すか考えてみるのも手だろう。そうすると、

「これがためニ」と読んだときに「之」が「客挙杯徐引」を指し、「見レバ」↓「則チ」という「レバ則」がきれいに成立することがみえてくるだろう。

それから、「これノためニ」と解答した人もいると思う。うーん、間違いとはいいいにくい。「為人」で「ひとノためニ」と読む（ちなみに「ひとノリ（人柄）」とも読む）ことから推測したのかもしれない。「の」が「の区別は厳密ではない。

ただ、結論として、「これノためニ」と読むよりは「これがためニ」と読むほうがベターで、さらにいってしまえば「これノためニ」という読み方は通常しない。一種リズムのようなものである。このような漢文独特のリズムに慣れるには、多くの漢文にふれ、音読することが効果的だ。

B

「以為」あるいは「以謂」は「おもへらく」と読む。意味は「思うに」。これは知らないと出てこないだろうなあ。面白い読み方なので知らなかった人はぜひ覚えてほしい。ちなみに「以レA為レB」だと「Aヲ以テBト為ス」と読み、「AをBと思う」という意味。

E

「尤」は現代語でも「もっとも」と読む。「犬」ではない。

「こ」では「最も」と「尤も」の違いを解説したい。

・「最も」…一番、ということ。「最もおいしいおにぎり」＝「一番おいしい

おにぎり」

・「尤も」…①「当然だ・とはいふもの」など。「そのおにぎりがおいしい

のももっともだ」「おにぎりはおいしいね。もっとも、具が梅

じゃなければの話だけど」「もっとも」「おにぎりがおいし

いだなんて、もっともらしい嘘をつくな」

②「とさら・すぐれる」。一番、というほどではない感じ。本

文での「尤」はこれ。

なお、現在「尤」は常用漢字ではないため、もっぱらひらがなで表記される。る。

問二

解答 みにやまひなくして「ころにうれひなきにしくはなしと

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン ひらがなの書き下し

解説

北大の大好きな「ひらがなでの書き下し・ただし歴史的仮名遣いで」という問題だ。歴史的仮名遣いについては、はじめは難しいと感じるかもしれないが、慣れればなんとかなるものである。

とりあえず書き下しを考えよう。訓点をヒントにしなから、まずは次のようなことに気づきたい。

①「莫若」がどつやら問題作成者が聞きたいところらしい

②「身無病」と「心無憂」は対句っぽい

③「而」が文中にあるからこれは置き字

①に気づくのはとても大切である。「こをきちんと書き下せているのが最大のポイントである。

まずは①について考えよう。結論からいえば「莫若」は「若くは莫^なし」と

読む。「莫如」という組み合わせなら目にしたことがあるかもしれない。「莫

如(若)A」で「Aニしくハナシ」と読み、「Aに及ぶものはない」Aが一

番だ」と訳す。

「若」と「如」は非常に似た使い方をされる。

・「若」…「とシ・しく・もシ・なんぢ

・「如」…「とシ・しく・もシ・ゆく

したがって、「若」「如」が登場したときには、もう一方の字に置き換えて考えてみると構文が見えてくるかもしれない。

次に②と③について考えてみよう。

まず、「身無病」「心無憂」がよく似ていることに気づきたい。「身^ま心^こ」「無

無」「病^び憂^う」となり、しっかり対句になっている。対句の場合、通常、

書き下しも同じ語順で行うため、片方だけやればよい。楽だ。さて、自然に

「身に病無し」「心に憂ひ無し」と書き下せたのなら、それでよい。だが、主

述について迷ってしまった人はぜひ以下の解説を読んでほしい。

本来漢文というのは、無論例外もあるものの、主語十述語十目的語十補語でできている。これに当てはめて考えれば、「無し」が述語であるから「身」は主語、「病」は目的語あるいは補語になるはずである。そうすると書き下しは「身病ヲ(ニ・ヨリ)無し」となる。

だが、「無」は返読文字である。返読文字とは、下の語からその文字に返って読むことの多い字をいう。「不」「雖」などいろいろある。その中でも特

に、「有・無・多・少・難・易」は、述語＋主語の形をつくる。したがって「身無病」では「病」が主語となるため、「身に病無し」と書き下すのである。「心無憂」についても同様。

「而」は文中に登場するため置き字と考えられる（文頭なら「しかシテ」などと読む）。「なんぢ」と読むパターンもあるが、ここでは文脈的になさそう。さて、置き字「而」は順接なのか逆接なのかを判断しなくてはならない。前後の文脈を見てみよう。傍線部Cが含まれる文を訳すと、「いつも思うのだが人の至上の楽しみというのは、（身に病がない『而』心に心配事がない）が一番だ」となる。つまり、「身無病而心無憂」は作者にとって最上の状態を表している。「身無病」も「心無憂」もよい状態である。したがって、これらは並列であると考えるのが自然だ。よって「而」は順接。

最後に、歴史的仮名遣いについて。いろいろと法則めいたものはあるのだが、慣れてしまうのが一番よいだろう。北大受験者は、センターにせよ二次にせよ、漢文の過去問を解くときには必ず一度ひらがなで書き下してみるとよい。あるいは解説の全文書き下しをふりがなも含めて一度は目を通すことを習慣づけたい。北大漢文で、人生で一度も見たいことのないような歴史的仮名遣いを答えさせられたことはない。

問三

解答 病気や心配事を抱えた人が私の前にいたら、私はどうして自分の楽しみを味わいつくすことができるだろう、いやできない。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容を補う現代語訳

解説

「是」の指す内容を明らかにして現代語訳。指している⇨前述の事物を置

き換えている、ということなので、「是」の指示内容は傍線部Dよりも前にあるはず。傍線部C以降を見てみると、このような流れになっていることがわかるだろう。

人の至上の楽しみは、身に病なく心に憂いのない状態だ。

←

私には「是二者」がない

…ア

←

「然^{レドモ}」⇨だが、「是」のある人が、

…イ

この流れより、「是」⇨「是二者」であることが導き出せるだろう。アとイは、「是」⇨「是二者」の有無を対比軸と見た対比である。また、「是」⇨「是二者」より、「是」は二つのものを指しており、それが「病」「憂」であることは文脈より明らか。

さて、以上を踏まえて、傍線部Dの現代語訳に取り掛かろう。

書き下しは「人の是れ有る者、予の前に接すれば、則ち予安くんぞ其の楽しみを全うするを得んや」。現代語訳するにあたって、文法的に大切なポイントとこなれた日本語訳をするために大切なポイントをそれぞれまとめた。

「文法のポイント」

① レバ則：「接すれば、則ち」の部分では、「則」がいわゆる「レバ則」の用法で使われている。「レバ則」とは、「原因や前提を表す文（書き下したときに文末が「レバ」で終わる）＋則ち＋結果を表す文」という使い方のこと。

② 反語：「安クンゾシヤ」と送り仮名がつけられていることから反語だとわかる。訳すときの注意点は次の三つ。

ア「どうしてだろうか、いや〜でない」と書く。反語だとわかって
いることをアピールしておこう。

イ、反語の最後を「いやない」と訳さないこと。「蓋つゞぎル」ときなど、「どうして〜しないだろうか、いやない」と訳すと意味がわからなくなるため。

ウ、話し相手・読者に向けられる反語表現は、強調が目的である。したがって、「いやきつと〜でないだろう」と書くのはよろしくない。ただし、自分に問いかけている場合は反対に断定を避けていることもあるので注意。

「こなれた現代語訳をつくるポイント」

- ① 「予の前に接すれば」…現代語で「接する」といえばくつつくことを表す。だがそれでは意味が通らない。そこで「接」を含む熟語を考えてみると、「接客」「面接」といった言葉が思い浮かぶだろう。「この時「接」の字は「人と会う」ことを表している。このように、ただ書き下すだけでは意味が通らないときは、その字を含む熟語を考えてみよう。
- ② 「其の楽しみを全うする」…「全うする」と現代語でいえば、「最後までやり遂げる」「達成する」といった感じだが、今回はもっと「完全に」というニュアンスにフォーカスを絞るべき。

問四

解答

病人が薬を服用し楽になれば作者も体が軽く感じられ、酒飲みが酔い高揚すれば作者も愉快になるため、作者自身は必要としないが多量の薬や酒を常備している。(73字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

- ①「どのよう理由で」、②「どのようなことを自分のためにしているのか」、

- ③「本文を踏まえて」と指示の多い設問である。

傍線部Fは「蓋し専ら以て自らの為なり(思うにもつぱら自分のためなのだ)」となる。つまり、傍線部Fが含まれる「或」と蘇軾の会話を読めば、②はわかる。また、「或」の発言の最後に「何也」とあることから、どうやら蘇軾は①についても言及していそうだと見当がつく。③については、①と②にかかわる発言をまとめるときに生じる説明不足を補うことによって解答に盛り込んでいこう。

とりあえず見通しがついたところで、「或」と蘇軾の会話を見てみよう。「或」の発言には難しい言葉も構文も含まれていないので、難なく読めたのではないだろうか。「あなたは病気もないのに薬を多く備蓄し、酒を飲まないのに多く酒を醸造している。人のために自分が苦勞するのは、どうしてですか」という感じになる。

次に、それに対する蘇軾の答えを訳してみよう。これも注を見れば容易。「病気の者が薬を手に入れば、私はそのために体が軽くなり、酒を飲む者が酒に酔いつぶれば、私はこのために愉快的な気持ちになる。思うにもつぱら自分のためなのだよ」という感じ。

さて、蘇軾は「或」の「なぜ〇〇をするのか」という問に対して「××だ。思うに自分のためなのだよ」と答えている。つまり、「〇〇」こそが②「自分のために何をするか」であり、「××」が①「どのような理由で」に対する答えとなっている。

以上を踏まえれば、「病人が薬を服用し楽になれば作者も体が軽く感じられ、酒飲みが酔い高揚すれば作者も愉快になるため、多量の薬や酒を常備している」となる。これで十分だろうか？ いや、これでは説明不足である。その薬や酒を作者・蘇軾自身は必要としない、という点が重要である。これが③にあたる。

この文章の面白いところは、

- ・蘇軾は世界一酒が飲めないのに、世界一酒を好む
- ・蘇軾は健康で酒を飲まないのに、薬や酒を常備している

というところである。漢文ではこういう「なのにおしゃれ」を追求した文章がときどき出てくる。そこは作者も熱を入れて書いているはず。きちんと拾ってあげよう。

本文解説

第一部 酒が世界一飲めないのに、酒が世界一好き (5行目)「在予上者。」

書き下し

予酒を飲むこと終日にして、五合を過ぎず。天下の飲む能はざる、予の下に在る者無し。然れども人の酒を飲むを喜び、客の杯を挙げて徐に引くを見れば、則ち予は胸中之が為に浩浩焉落落焉として、
 酏適の味、乃ち客に過ぐ。閑居に未だ嘗て一日として客無くんばあらず。客至れば、未だ嘗て置酒せずんばあらず。天下の飲むを好む、亦た予の上^{きやく}に在る者無し。

現代語訳

私は一日中酒を飲んでいても、五合(約335ミリリットル)も飲めない。世の中の酒を飲むことができない者の中で、私以下である者はいないだろう(「私が世の中で一番酒が飲めないだろう)。だが(私は)人が酒を飲むのを喜び、客が杯を挙げてゆっくりと引き寄せるのを見ると、私はそれによって心が広々として自由になる感じがして、酒を飲んで愉快になる気持ちは、かえって客以上であろう。閑居には未だかつて一日も客がいなかったことはない。客が来たら、未だかつて酒を出してごちそうしなかったことはない。世

の中の飲酒を好む者の中で、また、私以上である者はいないだろう(「私がか世の中で一番酒を好んでいるだろう)。

第二部 飲まない酒や不要な薬を蓄える理由 (5行目)「常以為」

書き下し

常^{つね}に以為^{おも}へらく人の至^{しちやく}樂、身に病^{やまひ}無くして心に憂^{うれ}ひ無^なきに若^しくは莫^なしと。我^{われ}は則^{すなは}ち是^この二^に者^{しや}無^なし。然^{しか}れども人の是^これ有^ある者^{もの}、予^{われ}の前に接^{せつ}すれば、則^{すなは}ち予^{われ}安^{やす}くんぞ其^{その}樂^{たの}しみを全^まうするを得^えんや。故^{ゆゑ}に至^{いた}る所^{ところ}常^{つね}に善^{ぜん}薬^{やく}を蓄^{たくは}へ、求^{もと}むる者^{もの}有^あれば則^{すなは}ち之^{これ}を与^{あた}ふ。而^{しか}して尤^もも酒^{さけ}を醸^{かも}して以^{もつ}て客^{きやく}に飲^のましむるを喜^{よろこ}ぶ。或^{ある}曰^ひはく、「予^{われ}病^{やまひ}無くして多^{おほ}く薬^{くすり}を蓄^{たくは}へ、飲^のまずして多^{おほ}く酒^{さけ}を醸^{かも}す。己^{おのれ}を勞^{らう}して以^{もつ}て人の為^{ため}にするは、何^{なん}ぞや」と。予^{われ}笑^{わら}ひて曰^いはく、「病^{やまひ}む者^{もの}薬^{くすり}を得^うれば、吾^{われ}之^{これ}が為^{ため}に体^{たい}軽^{かる}く、飲^のむ者^{もの}酒^{さけ}に困^{こん}すれば、吾^{われ}之^{これ}が為^{ため}に酏^{かんてき}適^す。蓋^{けだ}し専^{もつ}ら以^{もつ}て自^{みづか}らの為^{ため}なり」と。

現代語訳

常に思っているのだが、人の至上の楽しみの中で、身に病がなく心に心配事がないことが一番だろう。私はつまり病氣と心配事(「是二者)がない(ゆえに至上の楽しみを感じられる)。だがこの二つがある人が、私の前にいれば、私はどうして自分の楽しみを曇りなく感じられようか、いやそれは不可能なことだ。だからいたるところに常によい薬を備えておき、欲しがる人がいればすぐにこれをやる。そうして特に、酒を醸造して客に飲ませることに喜びを感じる。ある人が言うことには、「あなたは病がないのに多く薬を備え、飲まないのに多く酒を醸造する。自分が苦労して人のためにそれらをするのは、どうしてですか」と。私は笑ってこう言った。「病氣の者が薬を手に入れれば、私はそのために体が軽くなり、酒を飲む者が酒に酔いつぶれ

ば、私はこのために愉快的な気持ちになる。思うにもつぱら自分のためなのだ
よ」と。

要旨

私は酒が飲めないが、他人が飲むのを見るのが好きだ。健康で心配事がな
い状態が最も幸せだが、客もその状態になることで自分も幸せになれる。だ
から私は自身の必要としない薬や酒を常備している。(91字)

【参考】蘇軾はどれくらい酒に弱かったのか？

本文中で蘇軾は「一日かかっても五合も飲めない」「自分より酒
が飲めない人間はいない」と自らの下戸ぶりを述べている。では、
実際彼はどれほど酒に弱かったのだろうか。

宋代の一合は約67ミリリットルで、現代日本の一合のおよそ三
分の一程度である。つまり蘇軾は「一日かかっても335ミリリット
ルも飲めない」ことになる。また、蘇軾が生きていた北宋時代に
蒸留酒はまだまだ一般的ではなく、蘇軾が飲んでいた酒はアルコ
ール度数がかなり低い醸造酒であったと思われる。よって蘇軾は、
現代の感覚でいえば「一日かかっても缶ビール一本さえ飲みきれ
ないほどの下戸だった」ということになるだろう。

(津田智沙、松野貴大、上野仁士朗)